

耕縁自豊

NO.61 西畑亮一

今回は、3月31日に開催された〈こころを開く会〉で聴かせてもらった興味深い話に体験談を絡めて、さらに日本の法制度についてピシッと書くつもりでした。が、急遽予定を変更しようと思います。と言うのも、5月3日の憲法記念日に、ダライ・ラマ14世から日本人と日本社会へのメッセージ(2010年4月28日、インド北部のダラムサラで行われた毎日新聞社の栗田慎一さんとの単独会見で伝えられたメッセージ)が発表されたからです。そのメッセージを受けて、私が大切だと感じたものをご紹介します。

ダライ・ラマ14世は、「私が思うに、現代教育は物質的な部分を重視しています。もし、人々が限界を感じているのであれば、教育システムにこそ目を向けなければなりません。私たちの内なる価値の重要性について学ばなければなりません。慈悲や愛といった内なる価値は内なる平和に基づきます。お金は内なる平和をもたらしません。お金は欲望とねたみ、そして競争をもたらし、人々の間に猜疑心を高めます。そう友人との間でさえも」と語ってくれています。私たちが、このメッセージから受取れることは何でしょうか。私たちは自己の「内なる価値」、つまり一人ひとりが独自に表現可能な慈悲や愛や平和等々の諸価値や観念を真に発見することではないでしょうか。真の発見について、ブルーストは外の「新しい景色」を見つけるのではなく、内に「新しい目」を持つことが肝心だと言ってくれています。その意味でも、気づきの機会を提供できる「教育システム」に要注目なのです。

「物質的な部分」がすべて悪いわけではなく、それが「内なる価値」を支えるところの平和や生活の安定を担保していることも見逃せません。また、慈悲や愛や平和といったものは、私たちの「物質的な部分」である脳が創り出した観念でもあります。それは人間の世界にだけ存在し、一人ひとり個体差がある物質的身体の内にしか存在しません。それらを高い次元で共有できるところに、人類の類的特長があると思うのです。そのため、人間一人ひとりの個体や個体差に注目して教育が進められると、各人の個別な学びが尊重されることとなります。「内なる価値」を自他共に知ることになり、そうなればエスカレートする価値一元的な競争に一定の歯止めがかかることとなります。弱肉強食の生存競争を脱して、目指すべき対等で双方向な共生へと近づけるのです。

私たちの誰もが特定の間人関係と地域社会と時代の中へと誕生して以来、良くも悪くも既存社会から支配的な諸価値を注入されています。したがって、個々人の生き方に関わる現在の困難な諸問題のすべてが入力と出力の仕組みである「教育システム」によって発生していると考えてもまったくの誤りとは言えないでしょう。パソコンで言えば、それは基本ソフトのようなものだからです。問われるべき価値観は、既成事実という現実的な力を背景に、根拠の有無を問わず正当性を主張して私たちに注入され続けてきたのです。例えば、注入前の純粋だった自らの幼き頃を思い出してください。私有や排他的競争の観念を、独占や収奪の観念を、初めから私たちは持っていたでしょうか。これらはすべて、内発的なものでなく外からの教育によって注入されたものなのです。



ではこれに対して、ちょっと待た！の声を上げるものを私たちは備えていないのでしょうか。4月の寺報で「第4回女人史を学ぶ会」の感想として、由美子さんが書いてくれている「人間に与えられた本能」とでも言えるものがそうではないかと思うのです。本来的に各人の内に備わっている点で、ダライ・ラマ14世の言う「私たちの内なる価値」とつながっていると思います。由美子さんもダライ・ラマ14世も、回復すべきその大切さを伝えてくれています。自分自身の内なる声に、今、そのまま、無心にそと耳を傾けようではありませんか。

*「人間に与えられた本能」は女人史を学ぶ会に参加されていたお坊さん宋正元さんの言葉です。感想とか書いてしまいましたが、報告のまちがいです。(；´Д`A`´)(惟)